

卒業論文

赤髭ハイレッディンの生涯
—『バルバロス・ハイレッディン遠征記』を中心に—

南西アジア課程 トルコ語専攻 4 年

8 5 0 2 1 4 9

藤巻晋也

1. はじめに	3
2. 第一章 バルバロス・ハイレッディン	4
1 人物像	4
2 活動記録	4
3. 第二章『バルバロス・ハイレッディン遠征記』の全体像	7
1 写本について	7
2 翻訳版について	8
3 構成	8
4 内容	9
4. 第三章『バルバロス・ハイレッディン遠征記』に見る戦闘	15
1 戦闘場面	15
2 ハイレッディンの艦隊の強み	18
5. 終わりに	22
6. 参考文献	23

添付資料： 『バルバロス・ハイレッディン遠征記』全訳

1. はじめに

15 世紀終盤から 16 世紀前半、オスマン帝国の海軍は地中海において絶頂期を迎えていた。一方でヨーロッパの国々はそれまで地中海が主体であった海洋貿易の新舞台を開拓し始めていた。この二つの事象を考えるにあたって無視することができないのは、当時同じく地中海で広く活動していた海賊の存在である。彼らの存在なくしてはオスマン朝海軍の急激な成長はありえなかったし、またヨーロッパの国々を新航路開拓という困難な選択肢にまで追い詰めることはなかったかもしれない。この 15 世紀から 16 世紀の地中海で活動した海賊の中でも最も強力で、最もヨーロッパの国々を悩ませ、そして最も成功した海賊はバルバロス・ハイレッディン以外にいないだろう。彼の名は兄のオルッチとともにヨーロッパではバルバロッサ（赤髭）として轟き、その名を耳にするものたちを恐怖に落としこんだ。彼は異教徒たちを恐れさせた大海賊であった同時に、オスマン朝の海軍提督としても活躍し、オスマン朝海軍を作り上げた人物でもある。そこで、本稿ではハイレッディンの自伝をもとに彼の生涯を取り上げていく。

本稿ではハイレッディンの口述から作成された書である¹*Gazavat-ı Hayreddin Paşa*（『バルバロス・ハイレッディン遠征記』）の全訳を基にその全体像を紹介する。この史料から分かるハイレッディンの生涯を明らかにすること、オスマン朝海軍におけるハイレッディンの重要性を明らかにすることが本論文の主たる目的である。

本論の構成は、まず第一章でハイレッディンの生い立ちから数々の海戦、都市や城塞での攻防戦、オスマン朝海軍提督への就任、そして晩年にいたるまでの生涯の略歴を取り上げる。第二章では、成立過程、構成、内容を紹介することにより『バルバロス・ハイレッディン遠征記』の全体像を明らかにする。第三章では、『バルバロス・ハイレッディン遠征記』の中で語られる戦闘に着目し、ハイレッディンが行った戦闘の特色、そしてハイレッディンの艦隊の強みについて検討して行く。

¹ Yılmaz Öztuna *Barbaros Hayreddin Paşanın hatıraları*, İstanbul, 1989（以下 Öztuna および Ertuğrul Düzbağ *Barbaros Hayreddin Paşanın hatıraları*, İstanbul,）

2. 第一章 バルバロス・ハイレッディン²

1 人物像

バルバロス・ハイレッディン (Barbaros Hayreddin) は 16 世紀の地中海において、商人、海賊そしてオスマン朝海軍大提督と、様々な局面で名を馳せた人物である。誕生年ははっきりしないが 1466 年から 1483 年の間と推定されている。彼の父ヤクップ・アー (Yakup Ağa) は Vardar Yenicesi 出身といわれ、ミディッリ征服後にそこに定住した軍人の一人であった。イスハック、オルッチ、フズル、そしてイルヤスと 4 人の息子がいたという。ハイレッディンはその 3 番目であった。

ハイレッディンは生涯を海での活動に費やし、地中海で通用していた言語、すなわちギリシャ語、アラビア語、スペイン語、イタリア語、フランス語などに精通していたと言われている。彼の風貌は、立派な体格に褐色の肌、赤毛で、豊富な眉毛とまつ毛と言った具合だった。また音楽を好んだとされる。

広く知られるバルバロス・ハイレッディンという名は一種の異名で、本来の名はフズルという。この異名の成立過程にはそれぞれ二つずつの説がある。バルバロスという呼称はそもそもフズルの兄オルッチに与えられた名だった。オルッチの部下たちが彼を呼ぶ際に「baba Oruç (オルッチ親父)」と呼びかけていたのが訛ったとするのが一つの説。ヨーロッパ側の人間がオルッチのことを呼ぶ際に、彼の髭がにんじんのようになっただけで「Barbarossa (赤髭)」と名づけたとするのが二つ目の説である。いずれにしてもこのバルバロスという名は、オルッチの死後にその後を継いだフズルが継承することになるが、記録上ではヨーロッパ側の人間がフズルのことをこの呼称で呼んだのは 1519 年以降からとされる。次にハイレッディンについては、フズルのイスラム世界およびオスマン朝への貢献を称えたスルタンが名づけ親だとされる。しかし、そのスルタンはセルムであるという説と、スレイマンであるという説に分かれている。

2 活動記録

ハイレッディンの海での経歴は、若い頃にミディッリ、セラーニック、エリボズの間で始めた商業活動から始まった。一方で彼の兄オルッチは早くから末の弟イルヤスを連れて地中海での海賊活動を始めていた。所が、あるとき活動の最中のオルッチがロードス島の

² この章で述べるハイレッディンに関する情報は全て以下に示した書による。
Şerafettin Turan, “Barbaros Hayreddin Paşa”, *Türkiye Diyanet Vakfı İslam Ansiklopedisi*, 5.cilt, İstanbul, 1992, pp.65-67 (以下 Turan)
Enver Ziya Karal, “Barbaros Hayreddin Paşa”, *İslam Ansiklopedisi*, 2.cilt, İstanbul, 1943, pp.311-315 (以下 Karal)

ヨハネ騎士団に捕らえられる事件が起きた。イルヤスは戦死した。16 世紀の地中海は海賊の巢窟とも言われたほどで、狩るほうも狩られるほうも常に命がけだった。ハイレッディンは捕虜となった兄を救おうと努力したが失敗に終わるが、オルッチは自力での脱出に成功する。オルッチがヨハネ騎士団の捕虜の身から逃れてしばらくした後に、商人ハイレッディンもまた海賊として名を挙げるようになった。海賊ハイレッディンはまずオルッチが拠点にしていたチュニスのジェルベ島へ向かって兄と合流した。

兄弟は最初に後のスルタン・セリムの兄にあたるコルクットの庇護下に入り支援を受けた。当時、つまり 15 世紀末から 16 世紀にかけての北アフリカはレコンキスタによってスペインから追い出されたムスリムであふれていた。その結果この地域の長年の秩序は崩壊して、海では海賊業も横行するようになっていた。ハイレッディン兄弟が北アフリカで活動を始めたのは 1504 年以降である。兄弟はやがて安定した足場を求めてチュニスのハフシ王家のエブー・アブドゥッラー・ムハメッド・b・ハサンと接触する。そして彼に戦利品の 5 分の 1³を収めるという条件でハルクル・バードに定住することになる。その後船の所有数が増えると拠点をジェルベ島に移して、活動圏をイタリア岸まで伸ばした。ジェノヴァ、ヴェネツィア、フランス、スペインの商船や戦艦との度重なる戦闘と勝利の結果、兄弟の力、富、名声全てが高まっていった。1513 年にはジジェッリを征服するが、ジジェッリの住民によってオルッチが太守に推される。こうして兄弟が北アフリカに建国した国の基礎が固まった。

1515 年になると、バルバロス兄弟はスルタン・セリムの庇護下に入るために贈り物を持たせたムヒッディン・レイスをイスタンブルに派遣する。その後、ビジャーイェを征服。当時アルジェを支配していたキリスト教徒の支配者フェルディナント⁴の死を利用してアルジェも征服。ついでその西にあるシェルシェルも手に入れ、オルッチはアルジェとシェルシェルにおいても太守となった。1517 年にはテネスおよびトレムセンを占領するが、1518 年になると再びトレムセンを奪われ、オルッチはこの戦闘で戦死した。この時アルジェでオルッチの死を知ったハイレッディンはオルッチの後継者として全権を継承した。

ハイレッディン⁵はオルッチの後を継ぐとまず、オスマン朝の庇護下に入るためにハジュ・ヒュセインをイスタンブルに派遣した。この際にハイレッディンはアルジェの正式な統治権とベイレルベイの称号、2000 人の兵の援助を受け、またアナトリアからの物資、人員支援の約束を得た。次いで、行政管理の観点からアルジェを二つに区分することを決めた。東半分はアフメッド・b・カドゥが、西半分はムハメッド・b・アリが支配することになったが、共に土着のエミールであった。このようなハイレッディンの動きと、トルコ人

³ 添付資料の文中では 7 分の 1 となっている。Öztuna, p.22 添付資料 p.10

⁴ フェルディナント 5 世 (1469–1516)。カスチリア、シチリア、アラゴン各国王を兼任。1469 年、カスチリア女王イサベラと結婚してスペイン王となり、全土を統一。

山崎宏、兼岩正夫編『新版 世界史事典』評論社 2001

⁵ この時に「セリム」がハイレッディンという呼び名をつけた。Turan

の北アフリカにおける定住は彼の敵を行動に駆り立てることになった。1519年にはシチリア皇太子 Hugo del Moncada が指揮する 80 隻の艦隊⁶が Harras 地区に遠征するが、ハイレッディンはこれを撃退した。上述の通り、記録上ではこの時に初めてヨーロッパ人がフズルに「バルバロッサ」という名を付けている。1520 年から 1529 年の間にはスペインが所有する小さな島を除いたアルジェ周辺の全ての地域を支配するようになった。しかし一方ではチュニスのスルタン・ムハメッドの攻撃やアフメッド・b・カドゥの反乱によって 1524 年には一度アルジェを手放すことになるが、翌年に再び奪取する。また、この頃になるとハイレッディンは計 35 隻の艦隊でイタリアからスペイン岸を脅かすようになり始める。グラナダではムスリムを救出して、北アフリカに送った。アルジェに連れて来られたイベリア半島のムスリムは計 70000 人になり、この結果人員と戦利品でアルジェが潤うことになった。1530 年にはペニョンを奪い、要塞を破壊して防波堤を築いた。しかし、翌年にはアンドリア・ドーリアが指揮する艦隊にシェルシェルを攻撃され、更にその翌年にはオスマン朝領土下のコロシとパトラスが奪われた。この結果、オスマン朝の艦隊を指揮させるためにスルタン・スレイマンがハイレッディンをイスタンブールに招集した。

ハイレッディンは 1533 年 12 月 28 日にスレイマンを訪問した。その後、アレppoに在る大宰相イブラヒム・パシヤを訪問後の 1534 年 4 月 6 日にアルジェのベイレルベイおよびアフメット・パシヤの後釜として海軍提督に任命された。これ以降のハイレッディンにはそれまでの海での活動に加えて、造船所の管轄という業務も加わることになる。こうして強力で整備された艦隊を設立した。1534 年になると 80 隻の艦隊でイスタンブールを出発して、途中で Reggio, Sperlonga, Fondi などのイタリア南部の都市を攻撃しながらチュニスに向かった。チュニスにつくと、ここを放棄したメブライ・ハサンに代わってこのチュニスを手に入れた。1537 年には Kofu を包囲するものの、失敗に終わったためヴェネツィア領の島々を手に入れる方針に転換した。翌春にエーゲ海へ向かってエリボズの南の 28 の島々をオスマン朝に加えた。

バルバロス・ハイレッディンの活動の中でも最も派手な功績を挙げたものの一つはプレヴェザの海戦といえるだろう。カルロス王とフランソワ一世の間のニースの戦いの後スペイン、教皇、ヴェネツィア、ポルトガル間で反オスマン同盟が成立した。これに従ってアンドリア・ドーリア率いる 208 隻の連合艦隊がコルフに終結すると、ハイレッディンは 122 隻の艦隊でアルタ湾に入った。1538 年 9 月 25 日、ドーリアはオスマン艦隊を駆逐するために艦隊の一部を率いて進軍するが、短時間の戦闘の後退却を余儀なくされる。しかし、翌々日の 9 月 27 日には激しい嵐をやり過ごすことと、ハイレッディンを追うことの二つの目的でプレヴェザに投錨した。これに対してハイレッディンはレブカスの北に陣取った後、右翼にトゥルグット・レイス、左翼にサーリフ・レイス、中央にハイレッディンという半月型の陣形で戦闘態勢に入った。結果ドーリアは敗走し、ハイレッディンは 36 隻の船と捕虜

⁶ 40 隻 5000 人という説もある。Kanal

を得た。このプレヴェザの海戦の勝利によって地中海では東地中海に続いて中央地中海の区域でもオスマン朝の優位が確立されることとなった。

プレヴェザの戦いの後にフランソワ一世が再びオスマン朝に接近した結果、地中海でカルロス王に対抗してオスマン朝とフランスが手を結ぶことになった。このためハイレッディンは 1543 年 3 月 28 日にフランス大使 Paulin と共に 110 隻の船でイスタンブルを出発した。途中でメッシーナ、レッジョ、オスティアなどのイタリア海岸を荒らしながら 7 月 20 日にはマルセイユに到着した。ここでフランスが執り行った儀式に参加した後、ハイレッディンは目標をニース征服に決めた。早速ニースに向かって攻撃を仕掛け、8 月 20 日には町を征服することに成功した。しかし城の方はなかなか落とすことができず、翌年に延期して越冬のために Toulon に行った。しかし、再びハイレッディンがニースを攻めることはなかった。それはカルロス王とフランソワ 1 世が再び同盟を結んだことによって、ハイレッディンのフランスでの立場が危うくなったのでイスタンブルに戻らざるを得なくなったためである。ハイレッディンは 6 ヶ月のフランス滞在の後イスタンブルに戻った。帰路ではジェノヴァで捕虜になっていた腹心のトゥルグト・レイスを救出した。

このニースへの遠征はハイレッディンの最後の大遠征となった。この後のハイレッディンは海での仕事よりも造船所での仕事に忙殺された中、1546 年 7 月に死去した。

3. 第二章『バルバロス・ハイレッディン遠征記』の全体像

以上のようなハイレッディンの生涯が知られるようになった背景には、彼の自伝である、『バルバロス・ハイレッディン遠征記』の存在が大きな役割を担っている。この章では、本稿で中心に扱うこの書の成立過程、構成、内容に関して順に触れることで、その全体像を明らかにする。

1 写本について⁷

『バルバロス・ハイレッディン遠征記』はオスマン朝スルタン・スレイマンの命によって回想録を残すことになったハイレッディンが、船乗りである一方詩人であった友人のムラディ (Seyyid Murad Çelebi) に書き取らせたことによって成立した。gazavatname と

⁷ この単元で提示する『バルバロス・ハイレッディン遠征記』に関する情報は全て以下に示した書による。

Öztuna, pp.5-8

Turan, p.67

いうジャンルに属する点、この書が提供する情報が全てオリジナルである点によって、オスマン朝文学において非常に重要な作品である。また、オスマン朝の航海の歴史を探る上でも貴重な書である。文はオスマン語で記されている。この書はイスタンブル、バチカン、ベルリン、シュトゥットガルト、カイロ、マドリッド、パリ、ロンドンの図書館で様々な本が存在している。最も古い本はハイレッディンの生存中に書かれたバチカン本である。ムラディがこの書を完成させたのは 1539 年であるが、その後 1539 年から 2 年間に渡って 180 の詩を加えている。更に、ハイレッディンの死後に短期間で補足編の記述を行った。ハイレッディンの死までが描かれたこの補足編を含む唯一の版はパリ国立図書館に存在する。ムラディはまた、1541 年に完成した書を後に全体を韻文形式でも記しているが、韻文形式で記されたものはイスタンブル大学図書館に伝わるイスタンブル本⁸のみである。

2 翻訳版について

『バルバロス・ハイレッディン遠征記』には内容の異なる複数の写本が存在するが、いまだ校訂本は刊行されていない。これまた主に研究に利用されてきたのは、アラビア語の翻訳版からフランク語に重訳された版であるという。Galotta⁹は、アラビア語訳もフランス訳も、いずれも非常に不完全なものであると述べている。このほかにイタリア語と現代トルコ語の翻訳版が出版されている。

現代トルコ語版には Yılmaz Öztuna と Ertuğrul Düzbağ の二人の翻訳者による二つの版がある。いずれも、イスタンブル写本をもとにしており、Yılmaz Öztuna の版には写本のコピーが 20 葉分つけられている（全体は 171 葉）。

この二つの版を比較した場合、Yılmaz Öztuna の版は現代の読者に幅広く読まれることを意識して平易な内容になっているため原資料の正確な訳とは言いがたい。しかしながら、諸般の事情により主にこちらを参考にすることにした。本論の末尾に載せた正編の全訳は全て Yılmaz Öztuna の版を採用しているが、Yılmaz Öztuna の版にはない、補足的な性質を持つ最後の補足編においては Ertuğrul Düzbağ の版を採用した。前述のように、この部分は、パリ写本にのみある補足であるという。原書において文体は韻文形式がとられているが、この現代トルコ語版においてはどちらも物語体、さらにはより簡略で、若干短縮された形式で書かれ、現代では分かりにくい風習や表現は翻訳の段階で削除されている。

3 構成

⁸ Istanbul Universitesi Kütüphanesi Türkçe Yazma 2634

⁹ Galotto, "Khayraddin Pasha", EI2, Vol.4, p.1158

『バルバロス・ハイレッディン遠征記』には章別構成は見られないが、翻訳版では随所に翻訳者による小見出しが付けられている。そのため、全体を通した構成は始めから終わりまで一貫してよどみなく進んでいくように思われるが、内容の大きな転換点に着目すれば構成をいくつかに分類することも可能だと思われる。転換点は二つある。

最初の大きな転換点は、ハイレッディンの兄オルッチが戦死する所であろう。『バルバロス・ハイレッディン遠征記』は上述の通り、そもそもはハイレッディンだけではなくバルバロス兄弟の功績を記録することが求められた書であるためか、この史料の前半部はオルッチを中心にストーリーが展開していく。オルッチが戦死するのは添付資料の 26 ページ目に当たることを考えれば、実に全体の 3 分の 1 以上がハイレッディンではなく、オルッチが主人公の物語が記されていることになる。この第一の転換点の後、初めて物語りはハイレッディンを中心に進行し始める。第二の転換点はハイレッディンがスルタン・スレイマンによって海軍提督に任命される件ではないか。内容の観点から見ると、実際にこれ以降ハイレッディンの敵として立ちふさがるのはスペイン王カルロスと、海軍将校アンドレア・ドーリアに尽きることになる。

このようにあえて転換点を設定するならば、この物語は 3 部構成といえることになる。しかし、ここで一つ注目しておくべき点は、この物語が完結する場面である。『バルバロス・ハイレッディン遠征記』は上述の通り、ハイレッディンの存命中に彼が口述した内容が物語のベースになっている。そのため、この物語はハイレッディン自身が死にいたるまでの話は記されていないのである。Yılmaz Öztuna の版でも、Ertuğrul Düzbağ の版でも物語の結末はプレヴェザの海戦の話をもって終わりになっている。更に詳しく述べれば、Yılmaz Öztuna の版ではプレヴェザの海戦の勝利の後のイスタンブルでの祭典と、ハイレッディンの養子カラ・ハサン・アーのベイレルベイへの着任が描かれて終わりとなる。一方で Ertuğrul Düzbağ の版ではプレヴェザの海戦の場面は最後まで描かれずに終わる。しかしこちらの版では物語の終結後に補足編的な話が付け足されている。この中では Yılmaz Öztuna の版と同じようにプレヴェザの海戦とその結末が描かれ、更には最後にハイレッディンの晩年と彼の死までが記されている。原書の紹介の部分でも触れたとおり、この補足編はハイレッディンの口述を元に記述されたのではなく、ハイレッディンの死後にムラディが付け足した。

4 内容

『バルバロス・ハイレッディン遠征記』は補足編を除くと、終始ハイレッディンの視点から事物を捉えた、自伝的性質を帯びる物語である。物語の全体に渡って描かれるのは、前半ではオルッチ、後半ではハイレッディンが幾多の戦闘を通してより力を増大させていき、商人から海賊、国家統治者、そしてオスマン朝海軍提督へと駆け上っていく一種のサ

クセスストーリーである。様々な場面が展開される中、イスラムへの信仰心と異教徒への憎しみ、海戦や陸戦の様子、戦利品、貧者への施し、大きな功績の後に報告に伺ったスルタンの御前で話に関する記述は繰り返され登場する。例えば戦利品に関する記述では、「水兵全員の手には 185 ドゥカート¹⁰の金貨、更には 5 丁の銃、4 丁の拳銃、8.5 カンタルの鉄、18zir のヴェネツィア産ラシャ、225zira の絹織物が行き渡った」¹⁰とあるようにその都度極めて詳細に内容を語っている。また、戦闘の場面でも、「異教徒には 600 隻以上の船があった。このうち 308 隻が戦艦、120 隻が最大の手漕ぎ船だった。艦隊にはオールを漕ぐ者のほかに 60000 人の兵士が乗っていた。何隻かには 2000 人以上の兵士がいた。」¹¹とあるように、敵方の戦力、戦闘員の人数にいたるまで細かく述べられていて、また実際の戦闘の場面も、両者の司令官の様子を中心にかなり詳しく記されている。このことは特に海戦よりも陸戦において顕著に見られる。その一方で、戦闘の中で実際に取られた戦術や、戦闘陣形についての記述はいくつかの例外を除けばほとんど記されていない。

最後に内容に関して今一つ述べておきたいことは、この書の中ではニースの遠征の話が語られない点である。この遠征は 1543 年に一時的に成立したオスマン朝とフランスの同盟関係を考える上で、ひいてはこの同盟の背後にあった当時のヨーロッパの政治情勢を考える上で非常に重要な事例である。また、この遠征がハイレッディンの生涯における最後の大遠征となった点において、ハイレッディンの生涯を一貫的に俯瞰する上で重要であるといえるだろう。しかし、口述筆記後の事件であったため、『バルバロス・ハイレッディン遠征記』のなかには登場しない。

以下に、現代トルコ語訳を参考に、『バルバロス・ハイレッディン遠征記』を小見出し毎に区切りながら、全体的な流れを紹介する。なお、鍵括弧で括った小見出しは翻訳者である Yılmaz Öztuna と Ertuğrul Düzbağ による。内容の要約は筆者による。これにより、『バルバロス・ハイレッディン遠征記』を通じて、ハイレッディンの晩年を除き、オルッチとハイレッディンの生涯をおおむね、追っていくことができることがわかるだろう。

【正編】

「壮麗王スルタン・スレイマンの命により回想録を書き始めた」

スルタン・スレイマンの命によって回想録を書くこととなった件

「父ヤクブ・アーのミディッリ定住と母との結婚」

父ヤクブ・アーのミディッリ定住/バルバロス兄弟商業を始める

「オルッチがロードスの異教徒に捕らえられ幾年か捕虜となった」

オルッチの拿捕とイルヤスの死/ハイレッディンがオルッチ救出をキングに要請/

サントウルルオール¹²のオルッチ救出作戦と失敗/牢獄でのオルッチ

¹⁰ Öztuna,p63 添付資料 p.37

¹¹ Öztuna,pp.92-93 添付資料 p.57

「オルッチがヨハネ騎士団の船から逃れ、救出される」

スルタン・コルクットの登場/ロードス島の船長とオルッチの掛け合い

「オルッチに用心する必要がある」

ある司祭の警告/暴風雨の中オルッチは自力で脱出/艦隊提督アリ・レイスから船を譲り受ける/ハイレッディンがミディッリへ帰還

「兄オルッチがエジプトのスルタンに着任」

エジプト太守の呼び出し/ヨハネ騎士団の反撃/オルッチがアンタルヤへ逃亡/スルタン・コルクットとピヤーレ・ベイの援助/イズミルで船を手に入れる/道中ヴェネツィア船を拿捕/ミディッリへの帰還/長兄イスハックの忠告/イスケンデリイェでエジプト太守と対面/エジプトの太守の庇護下に入る

「思うに世界は私のものとなった」

オスマン朝の情勢/ミディッリを去る/アヤマブリ島で見事な船を購入/オルッチ、ヤフヤ・レイスとともにチュニスへ/チュニス太守との契約

「お前の戦いが成功するように！」

ハルクル・バード港を手に入れる/サルディニアへ/デリ・メフメットの発言と巨船を拿捕/戦利品とともにチュニスへ帰還、貧者への施し

「異教徒たちが恐れ始める」

モラのアナポリ港へ/異教徒の船との戦闘/オルッチの負傷/異教徒が連合を組む/ベジャーイェ外洋での連合艦隊との戦闘/敵の籠城/ハイレッディンの忠告

「4 隻が 14 隻となった」

オルッチの決断/ベジャーイェ城に籠城する敵との戦闘/オルッチ重傷を負う/外科医を招集/外科医たちの診断

「兄オルッチの腕が切断される」

外科医の再診断/オルッチの腕を切断/春の訪れ/イベリア半島へ/グラナダのムスリムを救出/7 隻の異教船を拿捕/ミノルカ島での異教徒との会話/ミディッリへ/貧者、弱者への施し/ミディッリの住民の歓待

「私たちの海への情熱はあらゆる情熱を越える」

ミディッリ島での越冬/オルッチの悩みと決断/捕虜を売り、大金を手にする/収穫金の分配/水兵の帰郷/造船所で新しい船を建造/乗組員の増員

「貧者たちが私たちの航海に期待している」

17 隻の船を従えてハルクル・バード港へ来航/貧者への施し/チュニス太守との対面/チュニスでの越冬/シチリアで城を制圧/チュニスへの凱旋/ムヒッディン・ピーリー・レイスをイスタンブルに派遣

「スルタンに感謝されて二つの世界で・・・」

スルタン・セリムへの報告/スルタン・セリムの恩恵/ピーリー・レイスがチュニスに向かう/アルジェからの請願/ピーリー・レイスの帰還/スルタンの手紙

「敵船を追い払った」

アルジェへ/アラブ人の救援/異教徒との戦闘開始/10 隻の救援艦隊を拿捕

「スペインとの戦争」

異教徒をわなにはめる/ハイレッディンがチュニスに向かう/チュニス太守への苦言/アルジェへ向かう途中オスマン艦隊と遭遇/ムスリフレディン・レイスの機転の利いた発言とスルタンの恩恵品

「オルッチ・レイスの勝利」

ムスリフデイン・レイスがアルジェに帰還/オルッチの奇襲/異教徒への勝利/オルッチからハイレッディンへの指令/ジャイルで兄弟が再会そして越冬/テネスへ/テネスから逃亡したトレムセンの太守を追跡/太守の甥が再びテネスを奪取してオルッチを激怒させる/ウレマーの助言/反逆者を処刑

「裏切り者の首を切った」

オルッチが反逆者を処刑

「オルッチ・レイスの戦死」

オルッチがトレムセンの太守になる/トレムセンでの越冬/トレムセンの太守とバフランの共謀/カルロス王の怒りの勅令/オルッチが城を明け渡す/オルッチの戦死/ハイレッディンの決心/スペイン王からの使者/スペイン艦隊を撃退/ハジュ・ヒュセイン・アーをイスタンブルに派遣/ヒュセイン・アーがアルジェに帰還/スルタンの施し品/チュニスの太守の陰謀

「オスマン朝の領土が奪われたことは誰も聞いたことがない」

メスウドからの救いの依頼/トレムセンへの派兵

「トレムセンの報告書」

メスウドがトレムセンの王位につく/メスウドへの手紙/メスウドの裏切り/アブドゥッラーの懇願/再びトレムセンへ派兵/イベリア半島のムスリムを運搬

「戦争計略」

メスウドの籠城/トレムセン城陥落とメスウドの逃亡/アラブ人隊長の謝罪/アブドゥッラーが水兵を引き止める/イブヌル・カーディの死と愚息の登場/ヴェレディとチュニスの太守の陰謀/チュニス・ベイを捕らえる/アルジェへの帰途受けたヴェレディからの奇襲/打倒ヴェレディ

「裏切りの水兵」

カラ・ハサンの裏切りと傲慢な計画/あえてアルジェを放置する/兵と国家の統治はトルコ人特有である

「イブヌル・カーディの反乱」

イブヌル・カーディの攻撃/反乱の鎮圧/ウラマーの意見と水兵の意見

「アルジェを断念する」

分別があるのは水兵の意見/アルジェからの退散を決意/夢の中にオルッチが出てきて/アル

ジェを後にする/ジジェッリ入り/貧者への施し/翌春も再び海へ

「アルジェが揺れ始めた」

アルジェの人々の動揺/アルジェの住民の願いとイブヌル・カーディの発言/再びアルジェへ
/ジジェッリを出発し、アルジェへ

「イブヌル・カーディの死」

イブヌル・カーディはハイレッディンを恐れる/イブヌル・カーディの攻撃と敗北、そして
死/敵への情け/イブヌル・カーディの兵士たちの感謝の言葉

「アルジェ入り」

行軍令、アルジェ市内へ/硬貨に刻印すべきはスルタンの名前である/アブドゥッラーの謀反
と甥ムハメッドのベイ就任/フェルハットを捕える/ペニョンをめぐる攻防と攻略

「異教徒を大砲につめて打ち放った」

ムスリムを苦しめた異教徒を大砲で打ち放つ/カルロス王が激怒/スペイン艦隊を拿捕/アイ
ドゥン・レイスはイベリア半島へ/ポルトンドとアイドゥン・レイスの海戦/ポルトンドの死
/アイドゥン・レイスを総督に/アイドゥン・レイスをイスタンブルへ

「アイドゥン・レイスがスルタンの御前で」

アイドゥン・レイスがイスタンブルに到着/スルタンを訪問/スルタンからの施し/イスタンブ
ル出発/スルタンの手紙

「私は王たちの間で笑いものになった！」

カルロス王の怒り/アンドリア・ドーリアの提案/ドーリアがシェルシェル港を攻撃/ドーリア
誤算

「アイドゥン・レイスが大西洋で」

アイドゥン・レイスがドーリアを追跡/アルジェへの凱旋/スルタンを訪問/再びアルジェへ/
スルタンの手紙/デリ・メフメット・レイスが地中海遠征へ/トレムセン・ベイの降伏

「私の艦隊が 21 度目のスペイン遠征に出た」

イベリア半島でムスリムが立ち上がる/シナン・アーの訪問とスルタンの命令/イスタンブル
へ/ドーリアを追跡/イスタンブル入りと人々の歓迎/スルタンの御前へ

「海軍提督」

謁見式/スルタンの提案/大宰相イブラヒムを訪ねてアレppoへ/そして再びイスタンブルへ/
海軍提督に就任

「私はもはや世界で最も偉大な艦隊の提督であった」

イスタンブルの偉大な造船所/スルタンの歓待とともにイタリア岸へ出航/カルロス王がチ
ュニスへ進軍/ハルクル・バード城の攻防と陥落/アイドゥン・レイスの死

「チュニスでの十字軍戦士の蛮行は大変恐ろしかった」

十字軍の蛮行/チュニスの町はハフシ家のものに/ヴェネツィア方面への遠征/サーリフ・レイ
スがもたらした宝

「プレヴェザの海戦」

ドーリアを出し抜く/オスマン艦隊の優位性

「ドーリアがうろたえた」

ドーリアが狼狽する/暗闇にまぎれたドーリアの逃走/トゥルグト・レイスの追跡/イスタンブールへ凱旋

「カルロス王の裏切りの提案」

カルロス王からの手紙/ルトフィ・パシヤの提案/ハサン・アーへ密かな命令/ハイレッディン
の策略/カルロス王が戦闘態勢に

「カルロス王の手紙」

カルロス王からのトルコ語の手紙/ハサンの返答/交渉決裂/カルロス王の攻撃/カルロス王の
軍勢の失態/ハサンの決意

「偉大なるトルコ人がやって来た」

大きな雷が降り始める/真夜中の奇襲/カルロス王が撤退を命じる/戦闘の後に

「皇帝は馬を食らった」

カルロス王は命からがら撤退/ハサンへ「ガーズィ」の称号/メフメット・レイスの戦果報告

「スルタンの造船所では数万人の労働者が働いていた」

スルタンの御前へ/イスタンブールの様子/ハサン・アーがバイレルベイに就任/物語の終結

【補足編】

「モソネグロ・カラ・ハサン・アー」

「スペイン王アルジェの前で」

「カラ・ハサン・アーの話」

「兵士のような準備がされて」

「スペイン王の手紙」

「カラ・ハサン・アーのスパイ」

「奇襲」

「海は大混乱になって」

「25000 人の捕虜」

「イスタンブールへの勝利の吉報」

「ハイレッディン・パシヤとアルジェの Ocaklar の前で」

「たくさんの愛に」

「兄弟よ幸せに」

「王は苦痛でもだえ苦しんだ」

「ハイレッディン・パシヤの末日」

「ハイレッディン・パシヤの死」

4. 第三章『バルバロス・ハイレッディン遠征記』に見る戦闘

1 戦闘場面

『バルバロス・ハイレッディン遠征記』について考察を行う場合、全体のストーリーを通して幾度も繰り返し語られる状況は幾つかあるが、その中で最も注目すべきは戦闘場面だろう。なぜならば冒頭のスルタンの発言から明らかなように、この書はそもそもバルバロス兄弟の生涯の記録であるとともに兄弟が行ってきた遠征や戦闘に関する記録も目的としているためである。¹²

本編の中で語られる戦闘場面の数をカウントしてみると、その数は17回に上る。これは基本的に戦闘があった事実だけではなく、戦闘の内容にまで記述が及んだ場面を対象に数えた。そのため、本編中で戦闘自体はもっと多く登場することになる。以下、この17回の戦闘場面を紹介する。

- (1) アールボズ島外洋でのヴェネツィア船との海戦
- (2) スペインへ向かっての航海中に起きた異教徒の船との海戦
- (3) ベジャーイエ外洋での海戦
- (4) ベジャーイエ城攻略
- (5) アルジェの攻防
- (6) トレムセンの攻防とオルッチの戦死
- (7) トレムセン城攻略
- (8) アルジェへの帰路中に受けた峡谷での奇襲
- (9) アルジェの反乱制圧
- (10) イブヌル・カーディの反撃
- (11) ペニョン城攻略
- (12) アイドゥン・レイスと海軍将校ポルトンドの海戦
- (13) アンドリア・ドーリアの攻撃とシェルシェルでの籠城戦
- (14) ハルクル・バード城の陥落
- (15) チュニスでの敵陣突破
- (16) プレヴェザの海戦
- (17) アルジェでカルロス王を撃退

このように羅列した場合に一つ気がつくことは、意外にも陸での戦闘場面が多いことで

¹² Öztuna, p9 添付資料 p.2

ある。実際に数で比較を行うとそれは歴然で、17回の戦闘場面のうち実に13回は陸での戦闘場面が描かれているのである。「イベリア半島の El-Meriye 港近郊にいる際に、7 隻の異教徒の船を見た。そのうちの一隻に追いつき、捕らえた。風は逆風だった。ほかの船は逃げた。」¹³のようにここでは戦闘場面と扱わなかった場面、主に異教徒の船を拿捕する場面は多く登場することも事実である。しかし、ハイレッディンは海賊そしてオスマン海軍提督であったので遠征記の中の戦闘場面は海戦が中心と安易に考えるのは間違いなのである。

戦闘場面に注目した際に今ひとつ明らかになることは、戦闘の内容は奇襲や敵の裏をかいた作戦が随所で見られる点である。例えばオルッチがベジャーイエ城へ攻撃を仕掛けた際には、ミノルカ島から救援に駆けつけた異教徒の船 10 隻を激しい海戦の後に拿捕し、この様な作戦が見られる。「10 隻のスペイン船に十字旗を掲げて 500 人の乗組員とともに乗り込んだ。ベジャーイエに舵を取った。ベジャーイエの城にいるスペイン人異教徒は、ミノルカから 10 隻の船が救援に来るのを待っていた。私たちが遠くから見ると、クリスチャンの同胞と勘違いし、とんがり帽子を空に投げて喜びの印を示した。こうして祭りと喜びの中にある城に接近した。異教徒たちは城門を開け、救援にきた船を出迎えるために海岸に散った。即座に私は乗組員たちを海岸に出した。「アッラー、アッラー」という声が大きく響き渡ると、異教徒たちは崩れ落ちた。私たちは城を占領した。」¹⁴また、スペインの艦隊からアルジェを防衛した場面においてはこのような作戦を取っている。「夜、暗くなると 3, 4 千人の兵士とともにアルジェの城の門から密かに出た。山を迂回してスペイン人たちの背後に降りた。暴風の吹き荒れる真っ暗な夜だった。即座に、偉大なる神は戦う僕たちを援助した。スペイン人異教徒たちは暴風と暗闇の恐怖の中において、オルッチ・レイスの動きを知ることができなかった。戦士オルッチは突如敵に攻撃を仕掛けた。異教徒たちは何か飛び出してくるまで油断しきっていた。全員剣で切りつけられた。」¹⁵ここに挙げた例はどちらもオルッチが指揮をとった戦闘を描いた場面ではあるが、ここからバルバロス兄弟や部下のレイスたちが、戦闘では時として劣勢な場合においても見事な機転や作戦によって勝利していった様子が伺える。

この様に戦闘場面においてどちらも見事な手腕を発揮して自身の勢力を広げていったバルバロス兄弟であるが、その気質は異なっていたようである。「オルッチ・レイスは、城の下に入ってガレー船を捕らえたがった。私は阻止したかった。兄の命令は危険だったからである。心配だったのはこれである。私たちが捕らえた 4 隻のガレー船と共にチュニヌスに戻ろう。6 隻はそのまま残そう。だが、とても大胆な兄オルッチは私の言うことを聞かなかった。攻撃することに決めた。」¹⁶

これはベジャーイエ外洋での海戦の後にベジャーイエ城に攻撃を仕掛けるか否かについて兄弟が意見をぶつける場面であるが、慎重なハイレッディンに対して、大胆な態度を貫くオルッチという構造が見て取れる。オルッチは自分の意見を貫いて攻撃を仕掛けた結果、

¹³ Öztuna, p.26 添付資料 p.13

¹⁴ Öztuna, p.34 添付資料 p.18

¹⁵ Öztuna, p.37 添付資料 p.20

¹⁶ Öztuna, p.24 添付資料 p.12

敵の放った銃弾が命中し、その傷が元で片腕を失うこととなる。また、オルッチの無謀とも取れる大胆さは彼が戦死する場面でも描かれている。¹⁷トレムセンでの敗戦で異教徒の軍勢から逃亡する際に、彼は取り残された部下を見殺しにすることができず、周りの部下の説得を無視して引き返して戦った結果戦死している。つまりオルッチは海賊船の司令官として類まれな才能を持ち合わせていた一方で、結局は一部持ち合わせた無謀さによって自滅したのであった。

これに対して弟のハイレッディンはどうであったか。上述の通り、戦闘においてのハイレッディンはオルッチに比べてより慎重な姿勢を示していたことは明らかである。興味深い点は、彼は戦闘司令官としてのみならず一統治者としても巧みで戦略的な姿勢をとっていたことである。¹⁸その根拠を示す事例の一つは、スルタン・セリムとの結びつきにおいて明らかである。オルッチの死後に後を継いだハイレッディンが、カルロス王からの攻撃をかわした後真っ先に行ったことはスルタン・セリムへ使者を派遣することではなかったか。¹⁹兄オルッチを失って間もないハイレッディンは、オスマン朝のスルタンという、望める限りで最強の支援者との結びつきを確かなものにして、自らの力を安定させている。このことは以下の記述が明確に示している。「もはやスペイン人異教徒ですら私には匹敵しない。なぜならば、私の背後にはスルタン・セリムのようなこの世の統治者がいたからだ。」²⁰ 統治者としてのハイレッディンの巧みさを最もよく示すのは以下だろう。「しかし民衆の中に不満感があるのならば、それは国が放棄する必要があった。ある時から私はこのことを考えていて、今明確な決定をした。私たちが退散してからはアラブ人がアルジェを統治できないことは分かっていた。スペイン異教徒に対して配置することはさておき、私の退散によって商業生活をストップすることから皆が多大な害を受ける。アラブ人は国家の秩序を整えることもできない。私が去った後アラブ人有力者は一人ずつ脱落して、民衆に打ちのめされるはずであった。最終的にアラブ人は、唯一の解決策として、相当な恩恵でもって私をアルジェに呼ぶことにした。」²¹これはアルジェの統治を巡る件の部分であるが、ハイレッディンは自ら占領したアルジェの都をあえて一度手放して、再び以前の統治者イブヌル・カーディに統治させる。しかし、ここにはイブヌル・カーディの統治ではハイレッディンの統治下に発展した商業が確実に退廃し、その結果アルジェの住民が再びハイレッディンの統治を熱望するだろうという、確信めいた予想がある。この計略の三年後にハイレッディンはアルジェに行軍を行い、イブヌル・カーディを処刑した後に再びアルジェを統治している。²²

¹⁷ Öztuna, p.45 添付資料 p.26

¹⁸ アンドレ・クロー『スレイマン大帝とその時代』りぶらりあ選書 (法政大学出版局)、1992、pp.138-139

¹⁹ Öztuna, p.48 添付資料 p.27

²⁰ Öztuna, p.49 添付資料 p.28

²¹ Öztuna, p.60 添付資料 p.37

²² Öztuna, p.66 添付資料 p.40

以上のように、『バルバロス・ハイレッディン遠征記』の主題ともいえる戦闘場面は単に戦闘に関する記述にとどまらず、人々の心情も織り交ぜながら鮮やかに描かれているのである。だが注意すべき点を挙げれば、全編を通してハイレッディンが直接参加した戦闘については彼が敗北、敗走した戦闘についての記述が皆無に等しい点である。ハイレッディンの生涯を扱った他の書を参考にすれば明らかであるが、ハイレッディンは決して全ての戦闘において全戦戦勝というわけではなかった。²³此の点は、この書がハイレッディン本人による口述から成立したという事実を浮き彫りにしているのではなかろうか。

2 ハイレッディンの艦隊の強み

『バルバロス・ハイレッディン遠征記』の中でハイレッディン自身の敗北、敗走の結果に終わる戦闘場面はほとんど登場しないこと、しかしながらハイレッディンはその生涯の中で必ずしも全戦全勝ではなかったことは上述した。だが、16世紀前半の地中海においてハイレッディンとともにオスマン朝の海軍が栄華を誇っていたのは紛れもない事実である。それはこの書の中でも描かれる、絶頂期のプレヴェザの海戦勝利が象徴しているだろう。では、この時代ハイレッディンの艦隊、ひいてはオスマン朝海軍の強さの秘訣とは何であったのか。この点を考える上で有用な記述は『バルバロス・ハイレッディン遠征記』の中のいたる所に見られる。本稿の中で一般的な見解を示すことには限界があるものの、この書の提示する情報を元に可能な範囲で探って行きたい。

海上での戦闘を有利に進めるために重要なものは何か。船の質、指揮官の能力、戦闘員の数と様々な要素があるだろうが、見落としてはいけないのは物資の重要性だろう。単に物資といってもその種類は二種類が考えられる。一つは実際に戦闘中の兵士にとって欠かせない食料や武器弾薬で、もう一つは船や大砲を建造する材木、鉄などの資源である。まずは前者について見てみたい。カラ・ハサン・アーがアルジェに攻め込んできたカルロス王を撃退する際の様子を参照すると、カルロス王が敗退した主な原因は突如急変した悪天候と言えるだろう。²⁴しかし、この敗北を徹底的な大敗北にした要因はといえば大雨や海水に使う武器弾薬が使用不能になったこと、多くの船が座礁したために深刻な食糧不足に陥ったことがあげられるだろう。実際にカルロス王は命からがら戦場から脱出する前に非常に高価な愛馬をつぶして、自ら食らう場面も登場している。その結果、カルロス王の軍勢はもはや戦闘不可能なほどに弱り、カラ・ハサン・アーの軍勢によって大虐殺される。

では、次に資源の方の物資に着目してみる。ここで目につくのは、カルロス王のアルジェ進行の情報をつかんだスルタンがアイドゥン・レイスにアルジェの防衛強化命令を与える場面である。「アイドゥンよ、私はアルジェのベイレルベイであるハイレッディン・パシ

²³ 『スレイマン大帝とその時代』 p.142

²⁴ Öztuna, p.102 添付資料 p.63

ヤの働き全てに満足させられた。お前に 5 隻の船を与えよう。船にどれほどの荷を積みようとも、どれだけ必要であろうとも、大砲、道具、そして残りの船の装備に使う者を積むようにカプタン・パシヤに命令した。お前たちには特に、新しく鑄造された大砲が必要だ。取れるだけここから取るがいい。また、何人かの大砲技師も与えよう。」²⁵この事からわかるのは、ハイレッディンの艦隊は必要に応じてこのように戦闘に必要な物資・資源をオスマン朝から提供されていたということである。広大なアナトリアを領土下に持つオスマン朝の豊富な物資力に支えられて、ハイレッディンの艦隊は戦闘では物資面での安定を保っていたことがわかる。なお、上記した場面はハイレッディンがオスマン朝の海軍提督に着任する以前の場面である。スルタンと関係が強化された着任後にはますますの安定がもたらされたと考えてよいだろう。この様に、ハイレッディン率いるオスマン艦隊は常にその背後にオスマン朝の豊富な物資力があつたことが伺える。

次に物資と同じく重要な人員について見てみよう。人員に関しても、物資と同じ様にいくつかの場面でその供給源の一つがオスマン朝統治下のアナトリアなどの領土であつたことがわかる。戦闘で大きな功績を収めた後には自ら徴兵を求める若者が大挙している場面からもわかるように、人員つまり戦闘員の数に関しても恵まれていたのである。しかし、ここで注目しておきたいのはオスマン朝海軍の戦闘員は単に数の上だけで恵まれていたということではなく、質に関しても高い水準を誇っていたということが見受けられる点である。それは正編中の以下の部分が示している。「アナトリアから水兵に登録されるために多くの若者がやって来た。私はこれらの中から海の知識を持った 300 人をアルジェに送った。他のものは海の知識を学ぶために造船所に配置した。」²⁶この部分からわかるのは、ハイレッディンの艦隊の構成員となるものはあらかじめ海の知識を持っていることが要求されているということである。つまり、無差別に徴収した即席の人員を水兵に見立てるのではなく、資質の備わったものだけを採用しているのだ。このことによって、ハイレッディンの艦隊の人員は量で恵まれるだけでなく、質の上でも良質であつたということがわかる。人員という観点からもう一つ付け加えておきたいことは、『バルバロス・ハイレッディン遠征記』のあらゆる場面に登場する、有能なレイスたちの存在である。²⁷彼らの多くは元々海賊船の船長として名を鳴らしたものたちであるが、そういった有能な人材がハイレッディンの部下にいたのである。

では今度は強力な艦隊を維持する上で欠かせない、造船所に関する記述に着目してみたい。先に、オスマン艦隊の水兵が募集された場合、海の知識のないものは艦隊に配属される前に造船所で働くことによって海の知識を習得させていたことを示す部分をあげた。この点が示しているのは、この当時のオスマン朝の造船所は船を建造する施設であることに

²⁵ Öztuna, p.78 添付資料 p.48

²⁶ Öztuna, p.105 添付資料 p.65

²⁷ ヤフヤ・レイス、デリ・メフメット・レイス、ムヒッディン・ピーリー・レイス、コルドール・レイス、シナン・レイス、アイドゥン・レイス、コズダール・サーヒル・レイスそしてトゥルグト・レイスなどが登場する。

加えて、水兵の教育機関であったということである。また、当然見落としてはいけないのは造船所が建造する船は質、仕上がりのスピードともに良好であつたであろう事が伺える記述である。「労働者の多くはキリスト教徒の奴隷だった。だが無報酬ではなく、給料をもらって働かされていた。給料を貯めた奴隷は誰かにそれを払って、自由になり、故郷に戻った。職人と技術者は全員トルコ人だった。」²⁸船を建造するのは多くの人手を必要とする大仕事だが、ここではその人員の多くはキリスト教徒の奴隷でまかなっていたことがわかる。奴隷が強制的に作業させられる場合懸念されるのは作業の質であるが、それは給料制によって奴隷の仕事意欲を向上させることで見事に補われている。また、技術や経験が必要な重要な部分にはトルコ人を採用している点から、人事の上でも適材適所であり効率化が図られていたことが伺える。結果としてオスマン朝艦隊のために必要な船の建造、修繕を常に迅速に、正確にこなすことが可能になっていたのではないかな。

最後に、実際の戦闘においてハイレッディン率いるオスマン艦隊が敵艦隊に対して優位性を保った点が伺える部分を見てみよう。プレヴェザの海戦に臨むにあたってハイレッディンは、戦力が劣っていることを述べる反面、自らの優位性についてもいくつか述べている。その中で最も注目したいのは、「私たちにも幾つか優れた点はあった。最も重要だったのは、私の艦隊の全ての船とガレー船に私が指示を飛ばしていて、どんな命令も同じ時に一番離れたガレー船によってすら実行されることだった。」²⁹という件である。これに対してドーリア率いる艦隊に関しては、「敵の状態はこの反対だった。ドーリアは他の船と部隊にすら命令を下していなかった。実は敵艦隊はお互いの言葉が通じず、お互いにねたみあう類の人々が艦隊から出現していた。」³⁰と述べている。つまり、ハイレッディンの指揮下に最高司令官から下部構成員まで一律化されていたオスマン艦隊に対して、司令官ドーリアの下に様々な国、地域から集められたために統率が効かない連合艦隊という構図がわかる。この件を補足する上ではもう一つの点を上げておきたい。それは、正編中でハイレッディンがスルタン・スレイマンによって海軍提督に任命された後から度々登場する、造船所に関する部分である。ハイレッディン自らが述べているのは、彼が艦隊指揮と同時に造船所の指揮も執っていたことである。実際の戦場の司令官が、戦闘の軍需を支える造船所の指揮を同時に執っていたことは、オスマン艦隊では戦闘準備から戦場業務まで一貫して一人の司令官の下に収束されていた事実を示しているのではないかな。そして、このことは同時にオスマン艦隊の一律化を支える根幹であると見ることができよう。

以上、ハイレッディンの艦隊の豊富な物資と人員、人員の質、一律化された戦力についての記述を参考にすることから、彼が敵に対して持ちえた優位性は何から生じていたのかを考察した。だが、最後に補足として、ハイレッディンは全編を通して戦闘での勝利、幸運は神のお陰であるとする、敬虔なムスリムとしての発言も忘れていない点も挙げておき

²⁸ Öztuna, p.86 添付資料 p.52

²⁹ Öztuna, p.94 添付資料 p.58

³⁰ Öztuna, p.94 添付資料 p.58

たい。

5. 終わりに

ここまでバルバロス・ハイレッディンの生涯を明らかにし、また『バルバロス・ハイレッディン遠征記』の中で描かれる戦闘に着目することからオスマン海軍における彼の重要性を確認した。ハイレッディンは商人として身を立てた後に、海賊そして最後には海軍提督まで上り詰めたことから分かるように、その生涯を海に捧げた人物なのである。海軍における重要性においては、艦隊の指揮官、そして戦闘準備の指揮官として活躍したことを紹介することで明らかにした。プレヴェザの海戦の後レパントの海戦で敗北を喫するまでの間、地中海においてオスマン朝が覇を唱えたことは周知の事実であるが、その背景には海軍の立役者として道筋を示した赤髭ハイレッディンの存在があることを忘れてはいけない。

本論では根幹史料として『バルバロス・ハイレッディン遠征記』を扱うことでハイレッディンの生涯と功績を明らかにしたのだが、一方でこの方法には他者の視点が欠如していることも事実である。一人の人物の本質を知る上では本人の記述に頼ることは当然重要であるが、やはりその人物にかかわる他者からの視点を交えることができればより有益になるだろう。例えばハイレッディンのライバルであったカルロス王やアンドレア・ドーリアは彼と戦うことをどのように捕えていたのか。最大の庇護者であるスルタン・スレイマンの評価は如何様であったのか。これらの観点からハイレッディンを捉えなおすことは、彼の新たな一面の発見につながるはずである。以上のことを今後の課題として、本稿を締めくくりにしたい。

6. 参考文献

アンドレ・クロワ 『スレイマン大帝とその時代』 りぶらりあ選書（法政大学出版局）、1992

山崎宏、兼岩正夫編 『新版 世界史事典』 評論社 2001

Enver Ziya Karal, “Barbaros Hayreddin Paşa”, *İslam Ansiklopedisi*, 2.cilt, İstanbul, 1943

Ertuğrul Düzbağ *Barbaros Hayreddin Paşanın Hatıraları*, İstanbul (『バルバロス・ハイレッディン遠征記』)

Galotto, “Khayraldin Pasha”, EI2, Vol. 4

Şerafettin Turan, “Barbaros Hayreddin Paşa”, *Türkiye Diyanet Vakıfı İslam Ansiklopedisi*, 5.cilt, İstanbul, 1992

Yılmaz Öztuna, *Barbaros Hayreddin Paşanın Hatıraları*, İstanbul, 1989 (『バルバロス・ハイレッディン遠征記』)